

『菅家文草』卷三注釈稿（五）

佐藤信一

【一九一番詩注解補足】

前稿（「菅家文草」卷三注釈稿（四））の一九一番詩「金光明寺百講會、有_レ感」の第一句「三十日來草不_レ青」の平仄を「○○●●○○●●◎」としたが、これでは第四字平字の「來」が二個の仄字に挟まれる孤平になってしまふ。異文もない箇所で、「日」「草」ともに仄字であるので理解に苦しむが、唐賀知章の「題_三袁氏別業_一」一作偶遊の初句「主人不相識」の「人」の例が指摘されている（近藤春雄氏「中国学芸大事典」昭和五三・一〇、大修館書店刊。「主」は仄声、「人」は平声。「不」は、はなぶさ、花萼、また、大きいの義なら平声であるが、二句が「偶坐爲林泉」と対になる語が「爲」であることから、名詞・形容詞の語義は考えにくい。

【訂正】

今まで「類聚名義抄」を、どの本か明示せずに用いてきたが、全て観智院本である。これからは明示することにする。

校異に用いた略号を確認しておく。

【略号】

- 〈内A〉…内閣文庫A本（底本）
- 〈川口〉…川口久雄氏旧蔵本
- 〈内B〉…内閣文庫B本
- 〈尊A〉…尊経閣文庫A本
- 〈尊B〉…尊経閣文庫B本
- 〈尊C〉…尊経閣文庫C本
- 〈尊D〉…尊経閣文庫D本
- 〈蓬左〉…蓬左文庫蔵本
- 〈別雷〉…賀茂別雷神社蔵本
- 〈道A〉…道明寺天満宮蔵A本
- 〈多A〉…多和文庫A本
- 〈多B〉…多和文庫B本
- 〈東A〉…東大所蔵A本
- 〈東B〉…東大所蔵B本
- 〈京A〉…京大所蔵A本
- 〈京B〉…京大所蔵B本
- 〈陽明〉…陽明文庫蔵本
- 〈資A〉…京都府立総合資料館蔵A本

◇計會：数え計る。となるように計算する、の義。「戰國策」
「齊策」「孟嘗君出記、問門下諸客、誰習計會能爲之收、
責於薛者乎」は「客」とともに描かれる例。白居易「白氏文
集」卷十九「立秋日登樂遊園」「蕭颯涼風與衰鬢、誰教計
會一時秋」は「秋」の「計會」の例。

◇客愁：旅路の憂い。杜甫「卜居」「已知出郭少塵事、更
有澄江鎖客愁」がある。

◇毎夜：「毎」は、觀智院本「類聚名義抄」に「シハク」
「ツネニ」「ゴトニ」などの訓を見る。「ゴトニ」を採る。「白
氏文集」卷六四「早服雲母散」「毎夜坐觀水月、有時
行醉翫風花」とある。

◇不覺：さとらぬ、知らぬ義。自然現象に関して、知らないう
ちになる、の義か。白居易「與微之書」一作「此晝夜」、正在
草堂中山窗下、信手把筆隨意亂書、封題之時、不覺欲
曙」。

◇衣衿：着物の襟か。杜甫「長江」「未辭添霧雨、接上遇
衣衿」は「添」とともに用いられた例。

◇霽：觀智院本「類聚名義抄」に「ウルフ、カウフル、キヨシ、
ソ、ク、ヒタス、ワテム」、倭玉篇の訓「セン」「ウルラス」
「ソ、ク」「キヨシ」「フル」から「ウルラス」を採る。ぬれる
の義。川口大系は七月白露が降ると、旅愁に涙ぐむためとす
る。白居易「白氏文集」卷八「狂歌詞」「明月照君席、白露
霑我衣」とあるのは「白露」及び「月」とともに詠まれた例。

◇五十年：類例「韓詩外伝」「呂望行年五十、賣食棘津、年
後の「朗月」と拘るか。

七十、屠子朝歌、九十乃爲天子師、則遇文王也」とある。
道真はこの「五十年」を老齡としてではなく、壯年として捉え
ているのではないか。また金子彦二郎氏の指摘（増補平安時
代文学と白氏文集―道真の文学研究篇第二冊―昭和五十三年
四月、藝林舎刊）によれば、「白氏文集」卷七「白雲期」「四
十至五十、正是退閑時、年長識命分、心慵少營爲」に
拠るものとする。またこれに「類」と「慵」との類似も指摘す
る。ただ白居易はその例以外でも「五十年」年を好んで用いてい
る。卷七「詠懷」「五十不爲夭、吾今欠數年」、卷八「馬
上作」「五十未全老、尚可且歡娛」等がある。

◇類：觀智院本「類聚名義抄」に「オコタル、オロカナリ、物
ウシ、物クサシ、イトフ、フラン」、倭玉篇の訓「ウ」「モ
ノサシ」「イトフ」「ヨロシ」「コ、ロウシ」「モノウシ」から
「モノウシ」を採る。「白氏文集」卷六八「時熱少見客、因詠
所懷」「冠櫛心多懶、逢引迎興漸微」は類例。

◇二千石：漢代の九卿郎將から郡守尉に到るまでの官人。後世、
地方長官の称になる。「漢書」「百官公卿表」「自司隸至虎賁
校尉、秩皆二千石、西域都護加官宣帝地節二年」とあり、
また「漢書評林」に「師古曰、漢制三公號稱萬石。其俸月各
三百五十斛穀其稱中二千石者、月各百八十斛」と注する。

◇「白氏文集」卷七「詠懷」「昔爲鳳閣郎、今爲二千石、自
覺不如令、人言不如昔」は古詩の例。なお時代は降るが藤
原行成「權記」寛弘六年三月廿日条に「今夜除目等、下官給
二千石」とある。

◇箝：校異にも掲げた通り、他の諸本では「拊」に作る。箝は

扱む、とりわけ竹で扱む義。ここは口を嚙む義であろう。「箝」の和訓は、觀智院本「類聚名義抄」に「ハサム、ツカム、ツグム」とある。「説文解字」「箝、箝也。(段注)：箝脅持也。以竹脅持之。曰箝。以鐵有所却束。曰錯。書史多通用)从竹卝聲」。「卝」も扱む義。「史記」秦始皇帝紀贊「秦俗多忌諱之禁。忠言未卒於口、而身爲戮沒矣。故使天下之士、傾耳而聽、重足而立、卝口而不言。また「漢書」「龜錯傳」「是爲_レ友、數十歲矣。發怒削地、以誅_レ錯、爲_レ名其意、不在_レ錯也、且臣恐天下士、卝口不敢復言矣」。「箝」ならば、杜甫「大雲寺贊公房四首(四)」「晤語契深心、那能總箝口」の例がある。

◇家書：家からの手紙。道真の一八八「中途送_レ春」「花爲_レ隨時餘色盡、鳥如_レ知_レ意晚啼頻」にも杜甫「春望」の「感_レ時花濺_レ淚、恨_レ別鳥驚_レ心」が引かれていたので、ここにも杜甫「春望」「烽火連三月、家書抵_レ萬金」が投影するか。「家書」の用例には他にも、「白氏文集」卷一六「西樓」「鄉國此時阻、家書何處傳」がある。

◇世路：世の中。世渡り。「後漢書」「張衡傳」「以思_レ世路、斯何遠矣」。「白氏文集」卷二「讀史詩五首(二)」「山林少_レ羈鞅、世路多_レ艱阻」、卷五三「除夜寄_レ微之」「家山泉石尋常憶、世路風波子細諳」。後者は金子氏が、当該詩とともに、「菅家文章」卷一「傷_レ安才子」「誰疑世俗是風波、叫著蒼天痛哭何」の典故としても指摘する所。

◇託夢：夢に託す。用例、王粲「雜詩」「回_レ身入_レ空房、託_レ夢通_レ精誠」。「精誠」は真心。「多_レ疑」に対応するものか。ま

た「後漢書」「張衡傳」「抔_レ巫咸以占_レ夢兮、迺_レ貞吉之元符」とあるのは、「占」と関連のある例。

◇莫_レ道：言つてはならない。言うな。「莫」は禁止。「道」は「言」に同じ。「白氏文集」卷五七「臨_レ都驛_レ送_レ崔十八」「勿_レ言臨_レ都五六里、扶_レ病出_レ城相送來、莫_レ道長安一步地、馬頭西去幾時廻」は「勿_レ言」と対になる例。またこれは旅と言う状況でも一致する。

◇得意：自己の心に適うこと。「白氏文集」「舟中李山人訪_レ宿」
「得意言語斷、入_レ玄滋味深」、卷五「醜_レ楊九弘貞長安病中見_レ寄」「之子未_レ得意、貧病客帝城」。

◇清風：清らかな風。「詩經」「大雅」「蒸民」に「吉甫作_レ誦、穆如_レ清風」。「韓詩外伝」一には、「子貢曰、嚮_レ子之言、穆如_レ清風」。詩の用例に、「白氏文集」卷一八「獨眠吟二首(二)」
「就_レ中今也最愁人、涼月清風滿_レ牀席」とある。

◇朗月：明月のこと。「朗」は「明」に同じ。「詩經」「大雅」「既醉」「高朗令_レ終」傳「朗、明也」。「朗月」は「文選」卷三十、陸機「擬古詩十二首(十二)」に「朗月照_レ閑房、蟋蟀吟_レ戶庭」。「白氏文集」卷三十二「閑臥有所_レ思二首(一)」
「偶因_レ明月清風夜、忽想_レ遷臣逐客心」は、金子氏(前出)の指摘する所。また白居易の「清風」とともに「月」を詠じた例として文集、卷五「禁中寓直、夢遊_レ仙遊寺」「月出清風來、忽似_レ山中夕」がある。

◇蘆簾：葦で編んだ簾。「白氏文集」卷一六に「香鑪峯下、新_レ卜_レ山居_レ草堂初成偶題_レ東壁。五首(一)」
「來春更葺_レ東廂屋、紙閣蘆簾著_レ孟光」とある。卷六「新構亭臺、示_レ諸弟姪」

「蘆簾前後巻、竹筆當中施」は、金子氏の指摘（前出）にある。

【試訳】

192 早秋の夜詠

秋の初めになつて計算していたかのように旅の愁いが寄り添う

着物の襟が夜毎に潤されていることにも気付かなかつた

五十歳前の自分は心が物憂いという事はない

自分の任務である受領の仕事以外のことには口をつぐんでいる

家からの手紙が長らく途絶えているので詩を吟詠しては咽んでいる

世渡りには疑心暗鬼が伴うものだから夢見にかこつけて占つてみる

この道中の間に氣に入つたことがないと言つてはならない

清らかな風が明月とともに私が佇む簾に入ってくる

【考察】

①「箝」と「拊」の異文。

注釈でも述べたが「箝」は他の写本・刊本すべて「拊」に作る。また「拊」でも意味は通じる。であるから本来ならば、「拊」に校訂すべき箇所。ただ注釈でも述べたとおり、観智院本『類聚名義抄』に「ツグム」との和訓があり、「箝」も捨てるのは憚られる。ここは暫く原本のままにしておく。

②二千石について。

この語は音韻上の問題がある。具体的には、「二」も「石」も仄字。「千」は平。つまり孤平になってしまう。白居易の例もあるが、これは古詩である。底本で「三千石」に作る（右傍

に「二」と注記する）のは、「三」が仄字であることから、あるいは支持できる本文かもしれない。類例、『白氏文集』巻一「觀刈麦」に「吏禄三百石、歳晏有餘糧」とある。

（本学助教授）